

日本聖公会
ウィリアムス
神学館ニュース

2021年
 第110号

The Bishop Williams
 Theological Seminary NEWS

日本聖公会京都教区
 発行・編集人：黒田 裕
 〒602-8011
 京都市上京区嵯鶴門町380
 TEL：075-431-5406
 FAX：075-431-5445
 williams@muc.biglobe.ne.jp



お別れにあたり

司祭 下田屋 一朗

1992年、平安女学院中高
 チャプレンとしてたまたま近隣
 にいたためでしょう。森紀旦館長
 からタツカー司祭ご帰国後の教会
 史の担当を仰せつかりました。以
 来、気がつけば足かけ29年もの間
 ウィリアムス神学館に関わらせて
 いただき結果となったことに、我
 ながら驚いております。

担当科目はその後英国教会史、
 アジア教会史、聖公会論と拡がり
 ましたが、チャプレンの任期を終
 えた97年、三重県への異動ととも
 に神学館との関わりも終わるはず
 でした。しかしそうはなりません
 でした。

以前、定年退職される加納重朗
 司祭担当の教理学を引き継ぐよ
 うにとのお話がありました。遠
 隔地への異動に伴い自然消滅する
 ものとはばかり思っていました。と
 ころが、森館長から「どこへ行く

とも教理学は担当するように」と
 言い渡され、武藤主教から神学館
 の方も続けるよう命じられました。
 以後3年、桑名・四日市両教会に
 加え、渋滞瀕発の一般道しかなか
 った当時、片道130キロを半日が
 かりで走る、腰痛持ちの身にはい
 ささかハードな日々となりました。
 もともと私は物理学畑の出で、
 神学については晩年近い3年間聖
 公会神学院で学んだにすぎませ
 ん。新しい科目を与えられるたび
 に一から勉強し直し、精一杯背伸
 びするほかありません。その時々
 の神学館の事情の中で、「なぜ私
 が？」と戸惑いながら、授業の穴
 を防ぐ応急処置という思いでやむ
 なくお受けしてきました。受講者
 の方々には、本当に申し訳ないこ
 とでした。しかし、私にとっては得
 がたい学びの至福の時でした。

再び京都に移った頃、ヘブライ
 語の話がありました。全くの独学
 で大冒険でしたが、適任の方が与え
 られるまでのつなぎとして、せい

ぜい2005年の定年退職までと
 いうことでお受けしました。しか
 し受講希望者がなければ開講され
 ない選択科目ということもあつて
 か、後任の方が得られないまま、老
 害となることを懼れつつも齢を重
 ねる結果となってしまいました。
 それだけに、この度素晴らしい
 専門家をお迎えできたことを心

道を伝えて

”道“についてあれこれ想いを巡
 らせていた時、ふと「日本聖公会
 聖歌集の中で、”道“という言葉が
 歌われる聖歌は何曲あるのだろ
 う」と思い、秋の夜長に調べてみ
 た。事項索引にはこの言葉は載っ
 ておらず、ひたすらページをめく
 った末、99曲の”道“を見つけた。
 これは全580曲のうち2割に
 も満たない数だが、それぞれの
 ”道“が示す内容はとても豊か
 だ。最多は「主イエスの道」。以
 下、順に「険しき道」「命の道」
 「道を示す」「救いの道」「わがゆ
 く道」「暗き道」「新たな道」と
 続き、他にも印象に残る”道“が
 たくさん登場する。しかもメロ

から喜んでおります。また、かつて
 私に関わらせていただいた科目に
 ついても、その後それぞれふさわ
 しい専門家が担当して下さってい
 ることを心から喜んでおります。
 長い間ありがとうございました。
 (しもだやいちろう
 本館ヘブライ語教授)

ディを伴うことで、それぞれの味
 わいが増していると感じた。聖歌
 の言葉は歌うことによつて心の奥
 深くに届けられ、何度も繰り返
 されることで強く刻まれていく。
 そのことから、聖歌自身が”道を
 伝える”働きを持っているのだと
 気づかされる。私の場合も幼い時
 から教会で聴いたり歌ったりした
 聖歌が、知らないうちに心に刷り
 込まれ、自身を形成しているよう
 だ。これからも歌いつつ、主の示
 された道を歩んでいきたいと切
 に思っている。『いと高きあなたこ
 そ喜びへといたる道 主の光に照
 らされてわたしたちは歩みます』
 (聖歌473番)
 (辻彩乃 つじあやの
 本館教会音楽教授)

同窓会通信

私はウイリアムス神学館を1999年に卒業しています。入学時、与えられた3階の屋根裏部屋はエアコンのない夏は暑く、冬は寒い部屋で他の神学生と相部屋でした。2年の時に3階にエアコンが取り付けられたのですが、業者の施工ミスでドレンの排水が逆

流して部屋に流れ、床が水浸しになつてもエアコンが取り付けられたことを喜ぶほど、エアコンのない3階の生活は過酷なものでした。神学校在学中の夏休みに教区主教と養成担当者へ神学校生活について報告する機会が毎年あったのですが、報告すると必ず「もつとアカデミックな話はないの?」と尋ねられました。当時住環境の厳しさに加え、神学生同士の人間関

係から起こるトラブルはよくあることでした。当時を思い起こすと、他の神学生や関係者の方々と楽しい思い出がたくさんあるのですが、時に神学生同士で、また館長や主事とも意見が対立したり採め事が起こったりもし、その都度本気で向き合い、一つひとつ皆で乗り越えなければなりませんでした。

「20年以上も前のこと、まだ根

に持っているの?」と思わないでください。一見充たされなかったり、辛かったりした神学校での経験がその後、私が牧者として働くために貴重な経験になっていきます。私にとつて神学校での3年間は教会の縮図、神の家族がともに暮らすために必要なことを学び、養われた場です。

(司祭片山謙)

林間聖バルナバ教会牧師)

ウイリアムス神学館 体験入学

10月5日〜7日、体験入学が行われました。今回は4名の参加があり、それぞれ感じるころのあった3日間であったようです。参加された方々の感想を紹介いたします。

体験入学に参加して

仙台基督教会 有我 忠幸

体験入学は、短い期間でも収穫多く、恵みに満ちた時間でした。そしてこの貴重な体験を終え、仙台に戻った私はあることに気づ

きました。

全身がリラックスしていて、心がいつもよりも落ち着いているのです。毎日常昼夕の礼拝の時をゆつくりとする事ができ、授業でも黙想の時間があったのでしよう。日常の忙しさや緊張、興奮から、しつかり離れることができたのだと思います。

私は、普段から自宅で朝夕の礼拝と約10〜15分程度ですが、黙想や観想によく似た瞑想の時間をもっています。そうすることで普段から比較的落ち着きを感じながら生活していますが、今回はそれをはるかに超える体験でした。私たちは、日常の生活で多くの

ことに振り回され、心身を疲れさせてしまうことが多いと思えます。そんな時は日常を離れ、落ち着きを取り戻すことが有効であったりします。

私は以上のことから、私見ですがもし可能なら神学校が聖職の養成だけでなく、リトリートの為に社会に開放する機会を増やすことで、社会との接点をもち、地の塩、世の光として社会に貢献していくという宣教の在り方もあるのではないかと体験入学を通して思いました。

この度は貴重な機会をいただき、ありがとうございます。

大阪聖パウロ教会 薦田 久美子
主の平安がありますように

10月5日から7日にかけて行われたウイリアムス神学館の体験入学からの帰路は、とても不思議な感覚に包まれていました。とても穏やかで、深く暖かく包み込まれているようでした。これは神学館で先生方や神学生の皆さんと共に過ごした特別な3日間が、私の精神、肉体にとつてとても恵まれたものであった証だと思えます。

私たち体験入学生は、初日の集合時はガチガチに緊張していましたが、黒田館長、神学生の皆さん、前田主事のお導きでどんどんリラックスし、色々なことを語り合



いました。

悩みを話す人に対しての、皆さんの優しく真摯な言葉と態度は、とても参考になりました。朝昼夜の礼拝に出席できたことも大きな喜びでした。実際の授業にも参加させていただき、とても興味深かったです。

最終日、解散前に黒田館長と共に撮っていたいただいた体験入学生の写真は、全員が満面の笑みで、二日前の初対面の状態が嘘のようです。将来、この3日間で学んだこと・思いを、たくさんの人と分かち合えれば、と思っています。素晴らしい時を心から感謝いたします。

神愛教会 田中萌実

わたしは今まで、「神学校はどのような場所なのだろう」とさまざまな思いをめぐらせていました。今回、神学生とお話する機会をいただいて、神学校は聖職の養成という目的がはっきりした学校なので、神学生たちは「なぜそこにいるのか」という意識をはっきり持つておられ、問い直しておられ、ご自分の人生の旅路を見つめてこたとばにし、伝えられる方々だということを感じました。

また、大学までの学校教育で、通知表の評価を気にして生きてきたわたしは、神学館の礼拝と生活と学びによって育てられていくという教育は、生活のすべてが見られていて、評価の対象だということではないか、わたしなんて減点だらけだろうと怖がったりもしていました。しかし、実際にともに生活する機会をいただくと、神学生たちはありのまま一緒に過ごしておられる印象を受けました。むしろ、神学校は勉強だけではなく、人間としてすべての部分が全人的に成長していく場所なのだということが肌で感じることができました。

ウイリアムス神学館の皆さま、あたたかく迎えてくださったことに感謝しております。ありがとうございました。

「内助の功」

いいえ、「協働」です

徳島聖テモテ教会 宮田 美樹

夫が神戸教区徳島伝道区勤務となつてから、わたしは「宮田先生の奥さん」になりました。それまでは旧姓のままに仕事をしていたので、「横山さん」とか、「よっこ」「よつこちゃん」と呼ばれていました。「宮田」を名乗ることに抵抗はないのですが、わたしがどこにも無い「宮田先生の奥さん」と呼ばれること、扱われることはストレスとなっていました。コロナ禍になり、毎週礼拝を配信する側になり、コンピュータに強い夫が按手式の配信や、オンライン総会の補助書記として働く「手伝い」もするようになりました。信徒の域を超えているようで、でも聖職ではない自分の立ち位置がわからなくなっていました。

今回、大岡左代子先生のお話を是非聞きたい！と思い、体験入学に申し込みました。先生のお話を

聞けたこと、そして、神学館で3日間過ごせたことは、わたしの「霊の養い」になりました。わたしがわたしを取り戻すには、必要な事だったと感じています。オンライン総会の時、「内助の功やね」といわれ、「そんなんじや・・・。」と言葉を濁すしか出来なかったのですが、「いいえ、協働です」と言えるように、これからも研鑽を続けていこうと思います。

2021 東北研修

11月11日(木)～14日(日)、「傾聴、記憶と伝承―東日本大震災から10年、いま『宣教・牧会の十年』を問い直す」をテーマに聖ペテロ伝道所を宿舎として使わせていただいた本館の東北研修が行なわれました。

今回の研修では、初日に東北教区主教座聖堂・仙台基督教会にて「東日本大震災をおぼえて―午後2時46分の黙想」および東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクトのみなさんとしぼし懇談の時を持つことができ、最終日の主日には同聖堂にて聖餐式に共に参与し感謝と賛美を捧げることができました。初とはとても意義深いことでした。初

日の黙想の聖歌526番「みつめることから」は今回のテーマと共鳴するもの（「聴く」と「見る」は不可分の関係にあると考えられます）でしたし、八木正言司祭がメッセージのなかで紹介してくださった「微力だけど無力ではない」は参加者全員の後励みとなり、最終日の聖餐式では今回の体験を胸に世に派遣されていることを感じる事ができたからです。そして何よりも中二日間の訪問プログラムにはいずれも大きく心を揺さぶられ、私たちのミニストーリーとミッションを省察するにあたってまことに大きな問いを迫るものでした。

二日目午前の南三陸町では津波に飲まれながらも奇跡的に助かり被災された鈴木清美さんから、ご自身の体験と名簿碑にお寄せになった詠句をめぐる想いを、胸の詰まる思いとともにお聞きし、加えて震災遺構にまつわるご説明と「復興」の今後の課題について学ぶことができました。午後には、当時学校にて児童・教員の殆どが津波によって亡くなられた大川小学校の震災遺構に向かい、ご息女を亡くされた語り部の佐藤俊郎さんより当時の状況を詳しくお話しいただき筆舌に尽くしがたい衝撃を受け、容易には

言葉にできない思いにとらわれつつ、「未来を拓く」という同小校訓として「本来防災とはハッピーエンドのためにある」という貴重な示唆を与えていただきました。

三日目の午前には、磯山聖ヨハネ教会「祈りの庭」にて同教会信徒の三宅信一さんと中曾茂さんが出向いてくださり、亡くなられた三名の教友の方々をおぼえて鐘を鳴らしお祈りをお捧げすることができました。その後南相馬に向かったのですが、その途中で、今回全面的に、沖縄教区から寄贈されたワゴン車「うちなんちゃー号」の運転と案内を担当してくださった、先のプロジェクト

ト・メンバー、渡部正裕さんのご配慮により、当初のプログラムにはなかった関東地区を訪問でき、マスコミからはあまり光の当たらない同地における被災状況と津波の教訓、そして「お買い物支援」といった現在も続く取り組みと課題を学ぶことができました。その後はカリタス南相馬ベースの山田雅之さんにご同乗いただきそのガイドのもと同地を巡ることができました。「希望の牧場」では、被爆した牛を殺処分せず命ある限り生かし続けて今後につなげようというコンセプトに心を大きく揺さぶられました。また

テレビ等では分からなかった「帰宅困難地域」と至る所にある「中間貯蔵」地の広大なスケールを実感させられました。殊に前者の地区割が折々変わることに驚かされ、それにより地域の方々の分断状況も起こっていることも知りました。京都教区のエリアにもいくつもの原子力発電所がありますので、何かあれば一瞬にして見慣れた景色がこのようなに一変するということにも思いを馳せることとなりました。また、帰りには浪江町の請戸小学校（大川小とは対照的に全員津波から逃れることのできた）の震災遺構に立ち寄ることもできました。

これらの多くの概要は事前学習会でも学んでいたのですが、それとは全く違う、と言いたくなるほどの現実がそこにはありました。今回出会わせていただいた方々の思いをしっかりと受け止めて、この体験学習を私たちの歩みに活かしていきたいと思えます。

最後になりますが、今回の研修にあたり多大なるご配慮を頂いた吉田雅人・同教区主教および赤坂友司常置委員長、プログラムをコーディネートくださった長谷川清純司祭、運転とガイドそして細やかにご配慮下さった渡部正裕兄、快適な

宿をご準備くださった聖ペテロ伝道所の八木正言司祭、李贊熙司祭、吉村哲夫兄、災害対応デスクの赤坂聖矢兄、プロジェクトの皆様はじめここに書ききれない多くの方々から物心両面にわたり温かいご配慮とご援助、ご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。神学生たちの感想は本紙次号に、研修の報告は紀要『ヴィア・メディア』第17号に掲載させていただきます。（編集部）

【編集後記】

去る11月5日（金）、浦地洪

一・本館教授がご逝去されました。長年のご奉職に感謝しつつ心から哀悼の意を表します。本紙次号に追悼記事を掲載する予定です。◇恥ずかしながらこの10年で薄まりつつあったあの震災への意識が、先頃東北教区より発刊された『震災証言集』で再起動。現地で、風化どころか激しく動き始め現在化した思いです。今回の体験の観想を通して、私たちのミッションを再設定する必要を痛感しています。（ゆ）